様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25　年　6　月　3　日現在

機関番号：１２６１２
研究種目：基盤研究Ｃ
研究期間：2008～2012
課題番号：20520010
研究課題名（和文）　ウェーバーの宗教論と、同時代の諸宗教論との比較を通じた、宗教についての多角的研究
研究課題名（英文）　Reconsideration on religion through the comparison between Max Weber's theory of religion and his contemporaries' theories of religion

研究代表者
横田　理博（YOKOTA MICHIHIRO）
電気通信大学・情報理工学部・准教授
研究者番号：10251703

研究成果の概要（和文）：マックス・ウェーバーの宗教論を、同時代の様々な立場からの宗教論（ジェイムズ・ニーチェ・ジンメル・西田幾多郎・ヤスパースなど）と比較することを通じて、宗教哲学・宗教心理学・宗教社会学といった諸アプローチが分化していく状況を把握し、宗教についての多角的理解を追求した。その一環として、ミュンヘンのバイエルン学術協会に保管されているウェーバーの旧蔵書を閲覧し、蔵書へのウェーバーの書き込みについて調査した。

研究成果の概要（英文）：This research compares Max Weber's theory of religion with rival theories postulated by his contemporaries, including William James, Friedrich Wilhelm Nietzsche, Georg Simmel, Kitaro Nishida and Karl Jaspers and investigates the processes and situations in which different approaches, such as philosophy, psychology and sociology of religion, were differentiated. Through these comparisons, this study has inquired into religion from various standpoints. This research also includes an investigation of the actual marginal notes made by Weber in those books which he owned and which now reside in the Bayerische Akademie der Wissenschaften in München.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	700,000	210,000	910,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
２０１２年度	700,000	210,000	910,000
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学
キーワード:マックス・ウェーバー(Max Weber)、ウィリアム・ジェイムズ(William James)、フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ(Friedrich Wilhelm Nietzsche)、ゲオルク・ジンメル(Georg Simmel)、西田幾多郎、カール・ヤスパース(Karl Jaspers)、比較思想、宗教論

１．研究開始当初の背景

今日、世界情勢を考える上でも、日本社会を考える上でも、「宗教」についての把握は不可欠である。宗教に関連する事件や戦争が少なくない今日において、宗教問題についての把握・提言は社会的に要請されている。宗教と社会との関係・宗教と人間心理との関係などを総合的に含む、宗教についての多角的研究が要請されている。近年話題となったサ

イードの「オリエンタリズム」批判やハンチントンの「文明の衝突」論などの宗教論は、きわめて一面的・外在的な議論であり、宗教そのものの実態に迫るものではない。諸宗教の信者の主観の実態に極力入り込もうとし、またそのエートスを他の文化のエートスとの比較において特徴づけようと努めていたマックス・ウェーバーの宗教へのアプローチの仕方は、今日の情況についての有効な視座・分析方法を提供してくれるものと考えられる。さらに、この宗教社会学のアプローチの一面性を相対化して補完してくれる宗教論として、ジェイムズの宗教心理学やニーチェの宗教批判や西田幾多郎の宗教哲学などがある。これらのアプローチを相互に比較することによって、宗教について一層多面的な把握が可能になるものと考えられる。

ウェーバー宗教社会学を他の思想家による宗教論との影響関係の中に位置づける試みは従来不十分であった。その理由の一つとして、それが「社会学」・「宗教学」・「倫理学」・「哲学」といった複数の学問分野にまたがり、異分野間の接点が欠ける傾向があったという事情がある。本研究では敢えて学際的なアプローチを試みて従来の盲点を明らかにし、宗教についての多角的な視座を現代に活かす通路をひらくことを目的とする。

２．研究の目的

宗教哲学の伝統は古くからあったが、宗教に関わる現象・心理を客観的に考察する学問は、１９世紀後半から２０世紀初頭にかけて登場した。ウェーバーの「宗教社会学」も、そういう趨勢の中の一つの流れと捉えることができる。私のこれまでの研究は、ウェーバーのテキストを解釈することに中心を置いてきたが、このウェーバーの宗教社会学を、その時代の中の一潮流として捉え、同時代の様々な宗教論との関係の中で捉え直してみたい。たとえば、ウェーバーはジェイムズの宗教心理学を好意的に捉えた上でその論点を批判的に継承している。一方、ジェイムズを高く評価した西田幾多郎の宗教哲学も、ウェーバーと同時代の、ジェイムズからの一つの分岐として捉えることができる。また、ニーチェ・ジンメル・ヤスパース・ハイデガーといった思想の潮流ともウェーバーの思想は深く関わっている。これらを相互に比較することによって、宗教社会学・宗教心理学・宗教哲学の視座の分化について一層鮮明に捉えることができ、さらに、これらの多角的視座を今日の宗教論に活かす通路を確保できるものと予想される。

３．研究の方法

マックス・ウェーバーの宗教社会学の方法・視座・分析枠組み・具体的内容を踏まえた上で、それをウェーバーと同時代の様々な立場からの宗教論と比較することを通じて、ウェーバー宗教社会学の特性を導出するとともに、宗教論の多様な視座とその連関について研究する。具体的には、ジェイムズの宗教心理学との比較・ジェイムズを介しての西田幾多郎の宗教哲学との比較・ニーチェやジンメルとの比較・ヤスパースやハイデガーなどの実存主義的思想との比較を試み、それらとの影響関係を明らかにするとともに、現代の宗教論への寄与の可能性を探る。また、ドイツに保管されているウェーバーの旧蔵書について調査し、ウェーバーがそれらの図書に残した書き込みを解読することを通じて、思想的関係を一層明らかにする。

４．研究成果

(1) ジェイムズ・ウェーバー・西田幾多郎の思想的関係

①ジェイムズとウェーバー

ジェイムズの『宗教的経験の諸相』(1902年）に示された宗教心理学の立場を明らかにし、ウェーバー宗教社会学のアプローチとの異同を追究した。ウェーバー宗教社会学をジェイムズの宗教心理学と比較してみると、一方では、価値判断ではなく経験科学に自己限定し、信者にとっての宗教の実態を解明しようとする共通の態度表明が見出せる。また他方では、ウェーバーが宗教の中の思想・観念を比較的に重視するのに対して、ジェイムズは感情・体験の方を重視するという対照性が見出せる。また、ジェイムズが諸宗教の共通するところを探るのに対して、ウェーバーは諸宗教の違いをクリアーにしようとした。

宗教論以外の哲学的議論の中では、パースペクティヴに応じて認識が成立するという観点、「多元論」の立場、「合理性」の多義性、といった論点においてウェーバーとジェイムズとは非常に近い考えをもっていた。

②ジェイムズと西田

西田幾多郎の『善の研究』(1911 年）がウィリアム・ジェイムズからの大きな影響のもとに成立したことは周知である。これまでの研究では、両者の「純粋経験」概念の共通性と異質性とが問題とされてきた。しかし、本研究では、従来の研究が「純粋経験」に関心を向けてきたがゆえに、西田とジェイムズとの本当の関係が見失われてきたのではないかという疑念のもとに、次の二点に光をあてた。第一に、両者は「神人合一」の「宗教的経験」という状態を宗教論の中心に置いた。とはいえ、ジェイムズの考察が経験科学的な

宗教心理学の立場であるのに対して、西田は独自の宗教哲学を語ろうとした。第二に、科学の抽象性よりも現実そのままの豊かな光景を本質的なものとするフェヒナーの思想に両者は共感している。しかし、ジェイムズが「多元論」的立場をとるのに対して、西田は「一元論」的な立場をとる。

③ウェーバーと西田

ウェーバーの仕事が西田の思想にどの程度のインパクトを与えたのかはわからない。ただ、次の点だけは客観的に認められる。現在京都大学で保管されている西田の旧蔵書のうち、ウェーバーの著作として次の三冊がある。『宗教社会学論集』第二巻（1934 年 9 月 5 日に注文したものかと思われる）、『経済と社会（第二版）』（1935 年 4 月 27 日に注文したものかと思われる）、『学問論集』（或る個人より「謹呈」されている）。1934 年 8 月 12 日の書簡によると、『宗教社会学論集』第一巻も京都の自宅に所持していた。1925 年度の京都大学の演習題目にウェーバーの著作が挙げられている。日記によれば、1944 年 11 月 5 日にウェーバーの著作を読んだらしい。そして、西田の著作の中でウェーバーに言及されているのは次の二論文である。『哲学の根本問題　続編』（1934 年）所収の「形而上学的立場から見た東西古代の文化形態」、『哲学論文集　第三』（1939 年）所収の「人間的存在」。

④三者の関係

同じくジェイムズの『宗教的経験の諸相』にインパクトを受けつつも、そこから宗教社会学の方向に向かうウェーバーと、そこから宗教哲学の方向に向かう西田とを、同じ基点からの分岐という形で捉え直し、それによって、今日では分化した宗教心理学・宗教社会学・宗教哲学の三者が接し合っている状況を明らかにすることができるだろう。

西田は禅体験を通じた彼個人の求道的精神と一体化した哲学的思索を進めていた。彼が求めたのは“本来あるべき”宗教であった。これに対して、宗教を経験科学として観察・分析するスタンスをとり、宗教の“現にあった”あるいは“現にある”姿を捉えようとしたのがジェイムズとウェーバーである。

ただ、ジェイムズには、西田と似た“求道”性、換言すれば、意識や理性の世界を一歩踏み越えて宗教の本質を探っていこうとする意向があったのに対して、ウェーバーにはそのような方向性はなかった。理性への懐疑の立場がジェイムズにははっきりとあるが、ウェーバーは、――考察対象が非合理的な宗教体験であるとしても――あくまでも理性的な学問的スタンスをとっていた。とはいえ、そんなウェーバーの理性的な考察がもたらした研究成果は、当の近代西洋のエートスの様々な問題性を異文化との比較を通してあぶりだすものであった。つまり、結果としては、西田もジェイムズもウェーバーも、宗教哲学・宗教心理学・宗教社会学というそれぞれに個性的な仕方で、理性偏重の近代西洋の立場に対してその破綻・問題性を明るみに出すことになったと言うことができる。

(2) ニーチェ・ウェーバー・ヤスパースの思想的関係

①ニーチェとウェーバー

従来からとりくんできた、ニーチェとウェーバーとの思想的関係についての研究も進展させてきた。従来はとくに『道徳の系譜学について』（1887 年）に示された「ルサンティマン」説とウェーバー宗教社会学との関わりを探ることを主題とし、苦難を担う弱者の自己正当化欲求への着目においてウェーバーとニーチェとが共通する点などを指摘してきた。今回の研究ではさらに、ニーチェの『悲劇の誕生』（1872 年）や『ツァラトゥストラはこう語った』（1883～1885 年）や遺稿集『力への意志』（1901 年、1906 年改訂）などを精読し、様々な論点についてウェーバーとの関わりを考察した。具体的には、善と美との不一致の認識、「知的誠実さ」、意味を創造する主体性を重んじる人間観、幸福主義批判（「末人」批判）などの論点においてニーチェとウェーバーとの思想が呼応し合うことを究明した。

②ウェーバーとヤスパース

また、ヤスパースの『世界観の心理学』（1919 年）について、その苦難論（「限界状況」論）を中心に考察した。ヤスパースは、一つの世界観を正しいものとして提示する「預言者的哲学」と、何らかの世界観を正しいものとして提示するわけではない「世界観の心理学」とを異なるアプローチの仕方として区別し、自らは後者の立場をとると主張している。限界状況は我々にとって耐えがたい。したがって我々は通常それを覆い隠すような何らかの「支え」を所持している。苦としての限界状況にいかにして人は対応するのか。その一つの対応として、苦を正当化する教説としての「神義論」、そしてウェーバーのいう首尾一貫した神義論の三類型にヤスパースは言及する。また、限界状況への対応として形成される教説のことをヤスパースは「殻(Gehäuse)」と表現する。それは本来人々にとって耐えがたい限界状況に説明を加えることによって人々を安楽にする教説ではあるが、人はそれに固着してばかりいると活動力を失っていく。このように、『世界観の心理学』には、少なくとも、方法論・苦

難論・「殻」という概念への着目、という三点においてウェーバーとの親縁性がある。
そのほか、『歴史の起源と目標について』（1949 年）に表明された、近代自然科学をキリスト教が促進したという見解や、西洋中心主義批判においてもヤスパースの思想にはウェーバーとの近さが認められる。

③三者の関係
人は苦難にいかに対応するかという問題はニーチェ・ウェーバー・ヤスパースの三人の中心的問題であり、それぞれに特有のアプローチを示している。「実存思想」の系譜として“ニーチェからヤスパースへ”という線は周知である。しかし、その中間にマックス・ウェーバーという存在があり、彼がニーチェの「ルサンティマン」論から受け継いで展開した「神義論」についての議論をヤスパースがさらに継承して「限界状況」論を展開するに至ったという思想史的事実を本研究を通じて呈示した。さらに、ヤスパースの『世界観の心理学』がハイデガーに与えた影響の大きさは明らかである。ヤスパースを媒介項として、ウェーバーの苦難論はハイデガーの『存在と時間』（1927 年）における「死へとかかわる存在」の議論へとつながっていく。

(3) ジンメルとウェーバーとの思想的関係

ジンメルとウェーバーとの思想的関係について考察した。この二人が親しい知的交流をもっていたことはよく知られている。ウェーバーが学問上の仕事の中でジンメルの名を挙げて批判的検討をしているのは、その社会学方法論においてである。『ロッシャーとクニース』・『理解社会学のいくつかのカテゴリーについて』・『社会学の基礎概念』に、ジンメルへの言及がある。いずれもジンメルの『歴史哲学の諸問題』（1892 年、1905 年第二版、1907 年第三版）について検討しており、「主観的に思われた意味」と「客観的に妥当する意味」との区別が問題となっている。また、ウェーバーが「社会学者および貨幣経済の理論家としてのゲオルク・ジンメル」と題するジンメル評を途中まで書いていたことも知られている。
本研究では、ジンメルの宗教論をウェーバーの宗教論と比較してみるという従来看過されてきた課題に着手してみた。1898 年にジンメルは「宗教の社会学について(Zur Soziologie der Religion)」という論文を発表している。それゆえ「宗教社会学」の先駆者としてジンメルが位置づけられることもあった。しかしながら、そこで論じられている内容は、ウェーバーの宗教社会学になじんでいる者から見ると、どういう点で「社会学」なのか、疑念が残る。社会（人間関係）に存在する或る種の心理と宗教における心理との共通性を指摘したという意味でジンメルは宗教と社会との相等性（「宗教＝社会」）を主張したとは言える。しかし、宗教と社会とをジンメルが結び付ける媒介は「心理」・「感情」なのであり、そこに着目するなら、ジンメルのアプローチは「宗教心理学」とも呼ばれうるだろう。実際のところ、ジンメルは宗教についての自らの考察を「我々のたんに発生論的でたんに心理学的にすぎない研究」と称しているのである。
この「宗教の社会学について」でとりあげられた論点――たとえば、人間関係の中の「宗教心(Religiosität)」、「信じる」という心理、そして宗教の由来の探究が宗教の価値をおとしめないという論点――、これらはいずれも、のちの『宗教(Die Religion)』（1906 年、1912 年改訂）で再びとりあげられることになる。「宗教の社会学について」にはないが『宗教』ではとりあげられている論点として、「汎神論」や神の「人格」についての宗教哲学的な議論がある。

(4) ジンメルの著作へのウェーバーの書き込みについての調査

ミュンヘンのバイエルン学術協会(Bayerische Akademie der Wissenschaften)に保管されているマックス・ウェーバーの旧蔵書を閲覧し、そこへのウェーバーの書き込みについて調査した。とくに、ジンメルの『宗教』と『ショーペンハウアーとニーチェ』について書き込みを網羅的にチェックした。それを通じてウェーバーとジンメルとの思想的関係、そしてウェーバーとショーペンハウアー、ウェーバーとニーチェとの思想的関係について新たな知見が開かれた。

①『宗教』へのウェーバーの書き込み
ジンメルの『宗教』という著作をウェーバーはどう読んだのだろうか。『宗教』（1906 年の初版）へのウェーバーの書き込みのうちいくつかを紹介する。
「敬虔な人間であっても、その敬虔さをいかなる神にも向けない、したがって、敬虔さの純粋な対象にほかならない形象に向けない人間が存在する。すなわち、いかなる宗教ももたない宗教的な素質の持ち主である。」という文章の左にウェーバーは線を引き、欄外余白に「ゆがんだ定式化」と書き込んでいる。ジンメルの「宗教」ないし「宗教的」という言葉の定義が一般とは異なるにもかかわらずジンメルが明確な定式化をしていないということにウェーバーは疑念をもっていたようである。
また、ジンメルはこの著作の最後のほうで次のように書いている。「まさに、宗教の歴

史的・心理学的な推論を退けることによって宗教の品格を保持しうると信じる考えに対しては、その宗教意識の弱さを非難することができるだろう。」この文の右サイドにウェーバーは線を引き、欄外余白に「まったくそのとおり！」と書き込んでいる。人間が猿から進化したからといって人間の品格が冒瀆されるわけではない。これと同じように、宗教の成立の事情に学問的な考察を加えたとしても「宗教の品格」はなにも変わらない。このように主張するジンメルの見解にウェーバーは完全な同意を表明している。『ベルーフとしての学問』でウェーバーが主張した、学問的認識と個人の生き方・価値観とは互いに独立であって、前者が後者を決定することはない、という立場を思い起こさせる。「品格(Würde)」という言葉はウェーバーにとっても信念・信条と言ってよいほどに重要な位置を占めていた。「宗教の品格」を認めるという点で、ジンメルとウェーバーは、ニーチェとは異なる地平に立っていると言ってよい。

②『ショーペンハウアーとニーチェ』へのウェーバーの書き込み

ジンメルの『ショーペンハウアーとニーチェ』(1907 年）へのウェーバーの書き込みのうち、いくつかを挙げてみる。

第五講の中でジンメルは「そもそも認識理論上の明晰さは、彼［ショーペンハウアー］の強みではない。」と書いている。その右サイドにウェーバーは「ジンメルのもの［認識理論上の明晰さ］もまたそう［強み］ではない！」と書き込んでいる。

また、ジンメルによれば、ショーペンハウアーは、あらゆる価値は相対的で主観的だと考える。しかし、この点をジンメルは批判し、「価値が存在するのはただその主観のないしは他の主観の状態の中だけにちがいないというのは誤った推論である。」と書いている。ここの左サイドにウェーバーは線を引くとともに「そのとおり！」と書き込んでいる。つまり、すべての価値が主観的なものにすぎないのではなく客観的な価値が存在する、とウェーバーはジンメルとともに考えている。

ジンメルは次のようにショーペンハウアーを批判している。「道徳的なものの本質についてのすべてのショーペンハウアー的な考え、すなわち、我と汝との統一、自己と他者との間の区別の廃棄、他者への愛と自己愛との同等、――これらすべてが不精確でありゆがんでいるということを私は否定することができない。……他者への愛と自己愛とは、あたかもまさに同一の内的出来事が、あるときは汝であり、別のときは我であるというふうに、ただ対象を変えるだけであるかのような意味においては全く比較されえないものである。」この文章の右サイドにもウェーバーは線を引いて「そのとおり！」と書き込んでいる。そもそも「我」とか「汝」とかいう「個別性」が剥奪されて一つの統一体のもとに解消され、その統一体がたまたま我の方か汝の方かに向きを変えるというような発想のもとに「他者への愛」と「自己愛」との違いを還元することは無理だ、とウェーバーはジンメルとともに考える。

第七講の中でジンメルは、ニーチェは、利他主義という外的行為をキリスト教の核と見て、外的行為よりも心の内面のあり方こそが大事だという立場からキリスト教を批判したのだが、そもそもキリスト教は、そのような外的行為よりも魂のあり方そのものを重視してきたのであり、この点をニーチェは見落とした、という見解を表明している。キリスト教徒にとって肝要なのは「自己のうちに宿っている人格の質」なのだという主張について、「ニーチェはこのことを見誤っただけなのである。それは、彼の眼差しが、あのような内容的・文書的な違いを越えて、キリスト教の価値設定の究極的意味にまで届かなかったからである。」とジンメルは書いている。そこの右サイドにウェーバーは線を引き、欄外に「そのとおり」と書き込んでいる。ということは、ニーチェがこのようにキリスト教を「見誤った」ことにウェーバーも同意している、ということになるだろう。

また、ジンメルは、ニーチェの思想が利己主義や幸福主義として誤解されてきた点を指摘し、「ニーチェはこの点で、他のいずれの点にもましてひどく誤解されてきた。」と書いている。ここにウェーバーは、「本当にそのとおり！　しかし、彼自身に責任がある！」と書き込んでいる。つまり、ニーチェの文章を表面的に読めば、たんなる利己主義・幸福主義とうけとられても仕方がないところがある。とはいえ、それが「誤解」であることを、ジンメルとともにウェーバーも認めているのである。

さらに、ジンメルは、ニーチェが利他主義ではなく利己主義を主張しているとしても、それは自分の主観的な満足・快を求めるわけではなく、むしろ、自己への厳格さを説いていた点を指摘している。ウェーバーはここの欄外に次のように書き込んでいる。「全くそのとおり。彼は時折りそう考えていた！　しかし彼に信従する自然主義的なならず者の考えは違う。」つまり、暴力や略奪といった反社会的で野蛮な行為をあおるようなニーチェの言葉を真に受けて行動に移そうとする人々をウェーバーは「ならず者」と呼んで非難し、ニーチェ自身にもそのような文章を書いたのだから責任はあるのだと考えた。しかし、ニーチェ信奉者たちとニーチェその人とは違い、勝手気ままな自己解放の方向では

なく、反対に自己を厳しく律する方向を主張することがニーチェには「時折り」はあったとウェーバーは認めているわけである。ここには、ニーチェそのものとニーチェ信奉者とを区別して後者を非難するという立場が示されており、それは、ニーチェ信奉者の一人オットー・グロースを非難する手紙の内容とも対応している。

③そのほかの著作への書き込み

『哲学的文化』(1911 年) には、「男女両性の問題における相対的なものと絶対的なもの」・「ミケランジェロ」・「神の人格」・「宗教的状況の問題」・「文化の概念と文化の悲劇」・「女性文化」の六論文に側線ないし下線が多く引かれている。そして「文化の概念と文化の悲劇」には膨大な書き込みがある。しかし、これらの書き込みはすべてマリアンネ・ウェーバーによるものと考えられる。

『レンブラント』(1916 年) には、裏表紙を開いた左頁に、マリアンネのものと思われる書き込みが九行にわたってある。側線以外の書き込みはそれのみである。

『生の直観』(1918 年) は大半が袋とじの状態で、下線などは一切ない。誰も読んでいないものと思われる。

かつてウェーバーの蔵書であったジンメルの『貨幣の哲学』(1900 年) と『社会学』(1908 年) のコピーも閲覧した。両書に書き込みがあるが、『貨幣の哲学』への書き込みはすべてバウムガルテンによるもので、『社会学』への書き込みはウェーバーによるものとバウムガルテンによるものとが混在している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 横田理博：「マックス・ウェーバーの比較宗教社会学」、武蔵野大学（編）『心（武蔵野大学日曜講演会講演集）』第 32 集（2013 年 4 月）に所収、現在校正中（査読無）

② 横田理博：「勢力尚雅（編）『科学技術の倫理学』(2011 年、梓出版社）について」、電気通信大学（編）『電気通信大学紀要』第 25 巻第 1 号（通巻 41 号)、2013 年 2 月、9～22 頁（査読有）

③ Michihiro YOKOTA：“Three Problematic Issues in the Calvinistic Ethos as Pointed out by Max Weber”，電気通信大学(編)『電気通信大学紀要』第 22 巻第 1 号（通巻 38 号)、2010 年 2 月、41～48 頁（査読有）

④ 横田理博：「西田幾多郎の『善の研究』とウィリアム・ジェイムズ」、日本宗教学会（編）『宗教研究』第 362 号、2009 年 12 月、49～71 頁（査読有）

〔学会発表〕（計 3 件）

① 横田理博：「ウェーバーの法社会学に関して」、ヴェーバー法理論・比較法社会学研究会、2013 年 3 月 9 日、早稲田大学

② 横田理博：「マックス・ウェーバーの比較宗教社会学」、 第 543 回武蔵野大学日曜講演会、2012 年 9 月 16 日、武蔵野大学

③ 横田理博：「ニーチェからウェーバーへ――『ルサンティマン』説をめぐって」(“Von Friedrich Nietzsche zu Max Weber: Wie hat Weber explizit und implizit auf Nietzsches Theorie des Ressentiments reagiert?”)、 第 3 回日本－ドイツ社会学会、2010 年 11 月 22 日、いわき明星大学

〔図書〕（計 4 件）

① 横田理博（分担執筆）：茨木竹二（編）『ドイツ社会学とマックス・ヴェーバー――草創期ドイツ社会学の固有性と現代的意義』（2012 年 10 月、時潮社）のうち、論文「ニーチェからヴェーバーへ――『ルサンティマン』説をめぐって」を分担執筆（299～331 頁)。

② 横田理博（単著）：『ウェーバーの倫理思想――比較宗教社会学に込められた倫理観』（2011 年 12 月、未來社、440 頁）

③ 横田理博（分担執筆）：星野英紀・池上良正・氣多雅子・島薗進・鶴岡賀雄（編）『宗教学事典』(2010 年 10 月、丸善株式会社）のうち、「神義論」の項目を分担執筆（364～365 頁)

④ 横田理博（分担執筆）：橋本努・矢野善郎（編）『日本マックス・ウェーバー論争――「プロ倫」読解の現在』(2008 年 8 月、ナカニシヤ出版）のうち、論文「ウェーバー宗教社会学の新しい読み方―― 近代西洋のエートスを相対化する三つの文化比較」を分担執筆（187～217 頁)。

６．研究組織

(1)研究代表者

横田　理博（YOKOTA MICHIHIRO）
電気通信大学・情報理工学部・准教授
研究者番号：10251703